甲陽生花石類圖

370

716.2
.24
6996

是心軒蔵版

甲陽生華百瓶图

島田閑和
山直哉　梓行
三枝麻葛

甲陽百瓶序 滿盈

叟名一露號是心軒總陽人夙尚風流以貯花之道為樂嘗遊京師受松月堂之餘教得以極其術云屬者来憩杖於本州於是從学者多而緇素無不由其道盖其為教也必法天地

準五行故幽則可以祭神可以供佛明則和悦人之耳目非惟何遜愛梅淵明把菊茂叔稱蓮明皇好牡丹止於一偏而已亦可以為一家之道於是同好數百人數會演習則時時見成者殆將數千瓶矣乃其奇者不忍其隨成即収毀使無遺

嘗因使畫工圖之論以法度正以規矩其全備者百餘瓶譬諸淘沙見金一日同好相謀曰今所圖者願刻梓使後学者倣焉叟曰諾諸君之請何拒因出所圖之一巻命予序固辞不得聊述數言以冠巻首云

安永甲午夏五月

松鳴菴露牛識

自序

造物者の無尽蔵なるや千草萬木
雖も陰陽の二気を以ぬしく年々
葉々花發實結ぶも自然の至
工也山野澤池に色々を爭ふ四時の
華陰陽五行に離れず更に可お
の相なし故に生花ハ陰陽五行を

合して三体を象り士水の二ツを写く
五辞ニ酬對すまじハ辞ハ述る観能あると
ねめ定あし近世生華の風儀を案
ずた術の定る観態を失て俳の定あれ
を示己と礼見に教部ニ華を欲ふ人
多し然いつき嗟相ニの祖翁しく
美を爰すを常要とぞされいうる

行ハ教まじとも理義の明あらざる事なし
先師宣楠居士ひとる明をあ飽ハ著
記を読く要法を失りある杜律の
高き論何ニ寓し事師ニ随く一家ハ
貝義悉く備ふよつて華ニ請好士と
共ニ萬道の古義抄記ニ事を得る
將和主居乃杜中杜律の指意て

韜く趣意をとゞ見てよみ二三の事録
此ろ推唐して漢學すなわち凡数百
一日杜甫詩題に東く四季首々
集四季行けるといへる意をうくハ異度
ありむまと御意に者徒各秀逸也居
其ほど写さし紀存すなるあるまじ是を集に百
絶を撰んで撰みまちつもハ絶を并を

題よ一題にも集画し此を請ふもの数也
予いまし是を撰考する数寄に萬ず事
此園静ち秘ちそ哭さし経に詩
諸し甲陽生美百絶此ら是ま数
とのなりし

安永三歳次甲午仲夏

葛飾隠士

是心軒一露述

凡例

生花五體假名并配當

正花 陽 天

相(そへ) 令(あしらひ) 陽中陰 中央土

通用 五行 人徳

體(たい) 陰 地 性

留(とめ) 陰中陽 水

此五行五稱に配當して五行成る五稱を定む五行ハ利多大なり要ハ

下の圖をもつて一の名に

一 三才と合すとは一辨なり通用は五行合して辨辨と用とは一
辨なり然配當する時は陰陽五行の三辨なり

一 三才合と　辨用とて是は陰陽の二辨なり此時は通用は三才五行
辨分けて補ふ此三辨を他流にて三才の乃二辨と云予か流にて
は陰陽の二辨なり此陰陽の二辨の時は方角此二辨に分るゝの五
五辨無後の五辨も是なり已上五辨配當并に五行の出生を
千ケ一をも出すとなり

一 接気にて陰陽五行を働く事は前後左右長短屈伸表裏

とかくの差別をもつて働くに用ゆるといふ事なし　是より揺動乃
働きに委くは伝へき

一 草辨には肉骨の三辨あり又五辨に合せは肉骨を具足する事予か
家此秘伝なり委くは附言に出せと

一 五辨の出生長短を定るといふて始末の程子に陰陽五行の
質を稟て生するものなれは陰陽五行手足方位とも出と云事
なりかけ形に異形の出辨をなすといふとも是すは本辨は協和に割
合あり此理我は伊気あれは氣此屋に示にあり深く委く口伝也

一 強流にはこれ切といふ事あり強るに眼にて切る物は見苦しといふのゝ小

て深き意味なし是ハ身本切と云事といひ習ふ有其の世にての哉
いふくあれと生るハ出生共を傳を難に梅ちハ流通途の
枝なり草本木に枝葉なとも切あく出生よるあハ稀也全く
身本切にして身本を切さる新ふと云事なり又身本の後より枝葉ハ
の廻りたるハ縁の切と云て餘と而るも切と云ハ一旦なれ共身本切と云
事ハ意田へ有る事なり口傳有記さす尤見切も尤若しきとあふ好ふ
見切ふ紅枝ふる無座し予が家にてハ七分三分割を好む也

一 流流花に見ん除しと云事ハ草木花に未より枝葉なと生して見
除し意ハ同を知ふにてふとる除とけ難なりる鮮解なる事出生

もふ有的なる哉に婦ふある一の也猶あふよく本をきらひ前へ草花
きるを水際にてハ草木にて本を包むといひ体股ともいへる除ととも
云て婦ふ人もある是を以て嫌ひなるあ際にてよの本おしにてもある
也れて除く若しく流是残婦ふ附ハおまり草をきるハ出て
なしすきよも尤解此紙立に口傳を別して予が家の法ハ手あり
本のあへ草を付てきる事ある意味ありて本をまるとて草をきるも
同新也

一 馬盤廣口筏淌生ハ本辨の風景にあるハ是哉ふ景に應して
不辨筏り離し陰陽の三辨を陰陽又外の三辨に生するの也

花を合せる時ハ少しもまがひなく面躰外曲尺合(かねあひ)に協ふ拵ふ
生るを也引離して生るを誤と云人も安及ばず不要し
うしさりのく云事にしてそれに足らは

一 生花ハ一本つゞ何也て一躰を成ハ本躰也二を
三を生ハ本躰にハあらざる之し一枝一茎に陰陽五行の生
生ハ相と見るを本躰とする也要くハ第如の意ハ

已上の規格を守て宇宙陰陽を極めて七ケ條の内誤しく
云人あらは是の遺誤して疑を解べし

生花外因由

昔天竺にて霊山会上に釈迦如来の説法ハ斯まこと斷取るに
多くて枝を折たるハ迦葉尊者破顔微笑の事を表す此ハ暫(ざん)時の斷を
保たしめんが為に四に盛なるハ宝瓶に移し携えしまゆる生花
濫觴の事ハ諸書に委しく見えたれハ是を略す　本朝にてハ
伊弉冊尊(いざなみのみこと)を始めとして発りありしより起まる

生花流儀相続の事

往昔(そのかみ)梅尾山(とがのを)明恵上人ハ修法の時花を嗜くみ何事も何
事も道義を訓しめい自己も此流を専要として花く

道を敬ひ佛神へ供ふるにも私を用ひず生れ出る儘の姿を與へ
清浄を旨として此道は則神佛の御意に叶ふなりと觀じゆへし
となり是より明恵上人此道を世に行ひしより古雅にして理義深
く其後東山相公千利休居士なんどの先哲の名
義に随ふ事名家なる臨機應變にして佛意發揮多し
是を学ぶ者は相の道に泥て古義を知らず後世益法統雑乱して此道
衰へ規矩を失ひたるに於て中興松月堂釈英尊香栄此道の
妙を得たる人なり明恵の四紀に関し廃たるを興し絶たるを継生涯
此道を以て楽しみとしなり寛延の初予浪速に於て生花を学ぶ

事ありしに及ばぬ後に秘伝を授て猶も絶ありといへど
或は飾を以て或は是を雑事として今猶中流軒
宣柳叟に家随して生花の奥義を問ひに又庸軒流の明恵乃
古風を学びて松月堂の流を以て世に表する人なり予師と頼みて
此道に口伝を以て紀したる口伝に悉く予に傳ふ先生既に
卒して才勇如家を相續せしむるに及びて早世す今は予其
流を汲て此道を相續す

生花濫觴二流分るゝ事

近来此道諸流に別るといへども其本は二つありて其後諸流に

人の気質に随て其味にかはりつゝ甚しきハ流儀といふハ其人の癖なり
後世其実を失ひ癖斗を専用てこれをもて規格の是る物にいたる
人多し能く是を思ふべし

生花ハ気象を写す事

其生ハ其人の気象あらはるゝものなり故に相斗に泥むべからず只草木
の自然に因て気象を生ずるを正気とす又形容自然の徳を以て用ゆ
なれバ中にも草木ハ天地の自然に任せて不実時代なし正至なるもの
なり是を観に移して其志を移して自己の好矣を顧ず惜しむを本意
とす故其流をもって又形を写すを専一とする是生ずるのあるなり

古人の掟堅く守るべき事

古人の掟ハ堅く守るべき也然るに楷梯掛蓋十文字釘隠四目
或ハ假名なれバ婦女のたぐひを理なくして捨られたれバ名のみ見ゆるハ若
しれぬ所に忌むべきのいはれ人無しと云ふ此事あるを去りたる成也假名
にある絶ち相談をなさしむ陽の一偏となる是ハ陰の一偏に質をなす故
婦女なり若始めに陰陽の精を合されバ数を保つべし右の相ハ世に云
孤花と成故婦女なり陰気あれバ其口伝なり故去るべきとす

陰陽五行の理に悖らざる事

右例あるといへ陰陽の性精の理に悖らざるものハ子ハ男ハ是をむすびて庭おもて

蕣の沢山に咲たるを残らす伐捨唯一輪床上に生て客を饗應
せし類一旦ハ風流にして人をも感さしむれとも是ハ時の作意にして
後世の法とハなしかたし花ハ咲ても実を結ふものなれハ唯一輪の花を賞
せんとていまた開さる蕾数多有を截捨るに切捨るハ花道生育の理に悖れは是
その外さ類を見とるへし恵て予ハ作意ハ用ひさる所是等類を
も是に準して知へし

當時の花作意多き事

當時の花の風流をとるにハ古人の作意をとりたる人多し作意
とハ達摩の無絵小舟に芦斗生て牡丹の無絵にハ花数を用ひ

ら咲て生るる数なりとハ二重切のかれ竹に杜若をむめ斗生上の重にハ
流斗猶く生るる数なり舒ハ揚てかたくりて是ハ即興の作意に
して本離れ生花にあるへからす予ヵ社中に用ひ無し

立花生花大同小異の事

生花とハ立花とふ大に異なるとふ人あれとも本より花を数ふにハ花意
立花ハ立花ハ陰陽に合して七ッ道具として天地人三ッの
象形を合成しとるを本トす総て枝葉の花の奥なるものを
本標釘針金をもちて細工して陰陽天地の相應を考へ要とす
生花ハ陰陽天地に離れを象り枝葉を土舎水を一つに用ひすへ離に

配当する時ハ陰陽五行此之躰に土と水とを開きて合て五躰と
するなり五躰に配当されバ枝葉ふ至ふ具なれバ陰陽五行の之躰ハ
或ハ陰陽の二躰ハ或ハ陰の一躰ハ陽の一躰ハ陰陽五行の一躰に象て一枝の
内ふて一花の躰を象る所ふ具なるものハ三條ふて千變万化を働かせ
て無体とる是生花ハ此本意なり所ふ立花も生花も陰陽五行を躰
とする事ハ甚違ひなし只全体とるて無体とるの至極なり枝此
生花此道人も立花の事ハきかりとて立花ふ堪たる人も生
花の事ハ知らざるものなり

生花一枝一茎ふて一躰を象るを本躰とする事

生花ハ一本一花ふて生成さるを本意とす一枝一茎の内ふ陰陽五行自
然と備る事を賞翫する所ふ具足なる物ハ其形を以て陰陽五行此
相を全備とる是無体とる所ふ生なす事肝要也折葉ハ二種三ふ
至ハ草木共ふ皆其の生するに象りて是を合て一躰と
とるなり陰陽五行と三才とハ些へとも四ともとなるなり故
つとを以て生るを本意とる

花實賞翫異る事

山野水陸に生とる草木ハ時をたへとも花咲實を結へ花咲実
を賞翫するなり菓とるて八ハ種好味なるものも花の時ハ味へ

なし然ハ其の時ハりえて楽も薬となりてハ味へて楽むを一旦と
も此故に先哲も生ずるに、実物をまハさるゝ事無し

花ハ人の精をあらはし葉ハ神氣をあらはす事

生花ハ精をもつて理を取る故に精氣彼岸(ひがん)をたもるものなり依く
咲物を賞して花の清香を翫(もてあそ)ぶ況や実となる時ハ精
満てみ盡る相なり性ハ不変なれ共精ハ盛衰ありて草木も春に
あひて枯葉となるも又種子ハ猶てみ生して其の色葉の味ひも古今変
ことなきハ性也又茎生して艶(つや)をあらハし花咲て色青をあらはすも又
精なり葉ハ人の神氣をあらはすものなり依て人の目を悦しむるものといふハ
人の神をあらはすものといふハされは花よりも人の目を悦しめんを感ずべし
精氣をあらはすものなり枝葉ハ精さかんなるものなれは悦ぶ然ハ
精盡ざる相なれハ人々に愁を催すものなり挿花ものゝ花にハ
猶更さる様なれハ弱精盡て後ハ悔しくなる葉を撰ぶ事無きハ是
かしく能く心得べし

山野水陸草木差別の事

深山遠谷水陸に生ずる草木をよく分別して挿花べし山草と
野草とを合する時ハ山草を上野草を下に挿ふをよしとす然に若
草なれハ混雑をよく撰ぶもあり依て草木此下に実草を挿ものハ波

しも忌也ニミ切のとゞまへ事をきらひて甚ふかき大なる誤

なり假令古人かくのごとくきらひたる例ありとも是は心ありての事なれば

常盤なる物嫌ひなる事

萩梅子仏前老母子等の類をきらふ人もあれど假令花葉なるとも

なり花実ともみな手のいのちなる同類なりかし意味ありとも是をきらふ

しくみへしと云に記すごとく生花は精霊んに移る物を常磐とする

されどいのちの実となりて精霊へ入る相を顕す事となりて理をしらず

細は性精にかゝはる事なれば筆に尽しかたし二軸の傳をよく見るべし

生花に規矩ある事

生花は生々のたすけを規に梅とし又ハ流派によりて別也猶子ふ

事業は天地の紀綱に従て陰陽寒暑に生さる者なれば其地其所

様子に随ひ或は生花其地をも適して或は陰に随或は陽に随ふをするなるも

み神妙なるに随ひ同しく陰に相の変をするなる生花の花に通

ずるしくしる人は格別神のへの人に神よりなるの理とのこる萌す時は是

稀に規矩なく理にて其花の本体を失ひて生するなるものなり

あるへし万事規矩なるものは嫌ふ理の内に陰陽の紛備る

物なる成る是生花の規矩にして私にあらず天地自然の理也

委くは傳にあり

雞頭躑躅并毒なる草を用ざる事

鶏頭に一種の毒あり躑躅に二種の毒あることかハ毒草毒木ハ論せず只人の畜くるしきなり鶏頭躑躅此類にも毒あるもあれば見るとてもひろく植ることなかれ花よりも葉の類をまくハさるものなりといひ伝へたり

毒草毒木にも名擇する事

毒草毒木ハ用ひざることハ定る式也然るに毒草毒木に毒なし
ものハまれなり葉を用ひる草木にも毒ある類あり現(づ)に毒ある
類とくまいらぬハさしき毒ある類ハ古よりいひ伝へたり是を毒さる人ハ

かしく毒ありと定めて用ひざるゆゑに毒ハ苦しからじ

荊の類植ざる事

庭より荊の類植ざるハ別に毒あるといふにハあらず若し
うつくしき程もなく怪(け)我(が)あれども是れ不興なる故に古人もきらふ也
鋏(はさみ)の類をきらふハ若しくは熱して身体みハ茎(くき)に荊なるものハ山
よりきらひ来たり

蓮花を祝儀に生るをきらふ事

蓮花ハ佛前にのミ生(け)る花のやうに見えて祝儀の席に生るを
きらふも人の好まぬ故忌ひなり蓮ハ淤(を)泥(でい)より出て泥(どろ)に染まず清浄

なる物にして君子の徳あるとて古人も賞翫せり此今神事祝言なり其清浄にして君子の徳あるを嫌ふ理あらんや対の人八葉の蓮なりとて花数を生ける事ハ己が心を觀ずるのなれバ好んでも生[illegible]ことなり

河骨水中に立る事

河骨を水中に立る事秘伝なりといへ人あれ共是ハ古人誤て云をかけたる附足なく出生にまかせて水中に立るを本とする也

水仙丁子葉下葉の事

水仙を丁子葉にまかするの深秘なりといふ人あれどもさり葉にて八は古来の数ハ陰にして秘せる出生状ハ紀たる小四枚よりかにて其は花咲故に四枚よりも其ハ五枚まても六枚五ても七枚五てもよき様也程多くハ足ハ八の丁葉にして咲ものなり水仙ハ丁子葉ハ一家にていふハ丁子なるといふハ誤也生方ハ半数なりに伝ふるし水仙の葉数を二枚をもって丁子ハ丁数なれ共是ハ下葉にて見る所の数なり本の生方ハ半数なれバ出生をもって下葉にまかするは誤なるべし

馬藺廣口の事

馬藺廣口の類ハ今投入体の花なれバ花留ハ鎖鋏（くさりはさみ）の数又馬藺の数乃花にて纏の数を花留に用ゆなり

釣舟の事

舟の生方ハ流にてハ賑くすべし 乎流にても出船入船
泊舟のかハりハ用ひさる花形に作るべし

掛徒生花の事

掛花ハ赤き色の花を嫌して用ひさる火と云声の通ふ花を用ゆる
と云説あれ共一偏に混し庵の火ハ掛を續其事ハ嫌ふ
と云一旦の説ハまう(?)せて悉も可也猶古火のあるハ次風
も家を焼りハも家を流ともの大きのにも嫌ふいふ
なりなきの花を生てに作る二軸に書べし

祝言の生花の事

凡て祝儀の花ハ赤き色を嫌ふと云説あれどもこれ古への礼式の時ハ
白色を以て専らとすれバなり然るに今にてハ色々雑乱して花の
色白きハ本来の色なり故に祝儀の時白き色を嫌ふと云儀なく
一説に婚礼の時ハ赤き色を下に白き色を上に婚礼の時ハ下に白き色を上に
色をまぜてさすべけれバ此共説成立なき事ハ紅白取交て生ける方
ハ紅白といふ事をまぜもしめんたる心にハいづれの色をまぜ
たる若しく祝儀式に定まりたる又花を曲節に生けると猶の
曲なきハ生きなものなり又何にても花を生けるなき用するにす

送別の生花の事

送別の時ハ遊客を送るといふ事ゆゑ是儀式なり但海をこゆる餞ハ
にて俗説なり何にても珍花の類に生るものなりたゞ枝葉実の
枯損する或ハ虫喰枯葉抔ハ忌み嫌ふ事なり然れハ姿よく生るもの
なり一説に実類の内へ入枝をもちゆるといふ伝あれども生花の習ひにハ
あてハ伝ある又兼来の太さをましひ節り曲なることをきらふ事猶
の説あれともこゝに記しかたし

綰柳條の事

綰柳條の伝といふハ漢土にていにしへの時柳を綰て陽関の曲哉
謡ふ柳を綰るに或る時賓主互に柳二條を綰て見せん事を
契る計の式也他流に伝ある事にいへれなり他流の綰柳條ハ唯綰る
のみを綰柳條とのみいふて式ある事を知らず

生花を茶湯の席にいける事

近来生花を茶湯の席にいける人多し然れとも甚だ違ひなり
数寄屋向ハ狭き故に大方四畳半の生花を思慮して茶人ハ茶の
業を肝要として生花をもちひる事せず寂を旨として皮肉の辨抔ハ
生さるものなり

書院向生花の事

古流向の姿ハ美しく見ゆるものなれハ花を皮肉の科とせる
ものなり独り家元ハ専ら古流向としてハ大いに嫌ふ所なれ
人の嫌ひなり家元ハ骨科古流向に花多く皮肉を
生ずるを深く悪しみ独りたることを好むハなし時の宜に随ひ皮肉
骨何れにても生ずるなり

生花ハ活人の形状表す事

生花ハ自己の心を表して古流の学不生心の形をまつる
表しくものなれハ家元の形ニ自心を家元に表して活人の家相
をもしるし定まるの形状あるものなり表して生花ハ正也なり其の

本心の如くにして楽しく心得て必自然を海とするものなれ

生花ハ中央より出生とする事

都て花の出生を定むるの方に割附ハ中央より出生とする名目なれ
其生花ハ瓶中に蟠りなきを肝要とする故中央より出生し
たるハ瓶の口へ出生せる形状を假りに陰陽と名付
なり全く陰陽の二つに分つなり表の花の形ハ小二義を東方
西とし中央に居て東に向て花の左を前右を右と
なり西南北何れの方へ向ふも同じ又陰方西ともいふハ東西南北何れ
の方へ向ひても二主花のとるを右下付花を右とするなり活流花に

多くハ色を用ゆる也東方面を用る人もあり予か流ハ東方面をもつて
しかれ共流儀なり其時の宜きに随ひいつれを用るも可也

生花真行草之事

真の花形と謂ハ三才の如く本を正しく立て一本の枝を添るなり
行ハ陰の如く少し曲て花瓶を添るなり草ハ色の如く花瓶を大かた
曲て瓶をはなるゝなり委しき事ハ花瓶の図にあり花瓶の
働き等口伝なり

真行草之花瓶に合ふ事

真の花瓶にハ真行草の花を立ても真行草の花を生ても真行草
まる九本の花瓶なり横切のとうでてハ真ハ陰の
出生の瓶に象り行ハ陽の出生之瓶に象り草ハ又行の出生の瓶に
象る事二軸に委し

真行草を以て皮肉骨差別ある事

生花ハ皮肉骨の瓶をもつて真ハ行草をまうく時ハ皮ハ陽にして草の瓶
肉ハ又行にして行の瓶骨ハ陰にして真ハ之瓶なり此花瓶の象り和
ハ委しく筆にあらはしかたし

元三の松の古式

松ハ生るものハ元と斗とまるを常とし元かゝりて祝言挿たるハ生るなり

もろき床飾に用ゆべし　口伝

星夕の竹の古式

竹を生る事は七夕斗なり陰竹陽竹の枝へ雌蝶雄蝶をそれぞれ
の糸をもて継中央にかけ其方へそれの糸を配りさげるなり又祝ひ
年の時松竹梅と対して生るものもろき床飾に用ひて花の生
様ならなり

神事佛事の花の事

神事には花瓶の用に影向の座をえらみ向の花と云をもちふ也
又向の花は其時に当て現在を専なり影向の座の事あり新手
向の花乃まじはれあて秘伝すみ花には榊の枝を挿入るなり是は
神事の瓶に用ひざる也佛事の花はより影向の座をえらみ向の花を
専ら用ゆべし神事に同じ悪く秘伝なり

生花五體

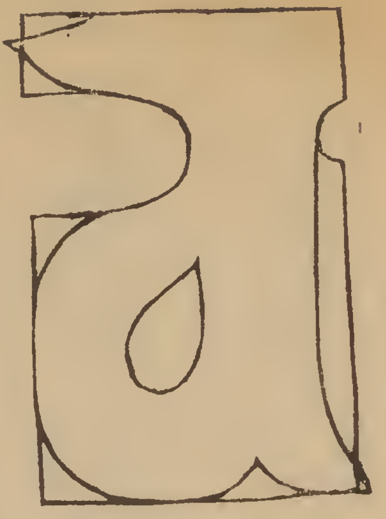
予が流の瓶の割合を定めて専とする花に一瓶を完全とする事を以て草本
それぞれの生花に用ひて一瓶に数あり生なる也一瓶に一瓶なれば相を
各あるなり五體の道にも同瓶なり下に名を出して其の
一瓶を挿とし又ゆる時は其を万本何れにても生けうる事
なし

五体圓備之花形

此体ノ枝先キ正花ト通用トノ間ヘノホリテ三角ニ見ユルヤウニ生ナス

獅子口表形水大之縛字之形

○字形ノ中ノ空穴ヲ蓮実ニ象ルナリ
蓮花ハ心ノ字形也是ヲ釘穴トスルニ秘傳アリ



獅口ト号ル事

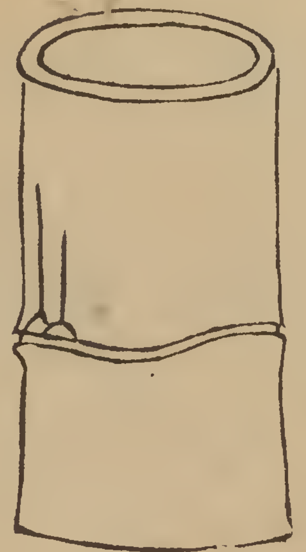
獅子ハ陽ノ変化ノ獣ノ司ナリ
又此水大ノ縛字ハ陽ノ精ノ字
形ナル故ニ獅口ト云此上ニ
甚深意アリ

惣ノ輪ヲ日ノ輪ト云テ
陰陽不二ヲアラハス

口ヲ四角ニ割是ヲ隅違ニ割トハ
三角トナル是火大ヲ表ス

三分ニ切欠タル所ハ月ノ輪ト云月ハ風大
ナリ如此風火ノ二大ノ割ヲ以残ル水地ノ
割アルコヲ知ヘシ

凢テ口傳ナルユヘ十ケ一ヲ出ス



又八ハ假名ナリ此花器ハ竹ノ内ニテハ本来無面目ノ形ナレハ本体ノ器ナリ又八ノ割ヲ開テ御口トナス御口ヲヒラキテ余ノウツワノ割トナス

一薄板　一花盆　一埀撥　一馬與

一廣口

右ノ花器各其家ノ寸法アリトイエトモ事シゲキニヨッテ畧之

[illegible]

爰に年ころいにしへを好む人ありけるか
其年来の図を集め錦絵ハさらにいへらん
絵本にハ予か覧し撰しけるを古き稀なる傳乃趣をきこえ
なくしハ世の中の絵を見出し事なし二軸乃傳あ
りけれは此度嚢哉を探しけれとも生花のまた稀なれなるをまし
於中にありける数へてかくハうめかねと人あり
全く書を写しけるに然るをも紙まり
ける本とことなる中にもた書をものとなり
云ふけれは